

橋本カツ子 訳・編

九四五年—

慟哭の満州

日本人孤児からの手紙



訳・編者紹介

橋本カツ子 かつし 1948年兵庫県に生まれる。1971年大阪外国語大学中国語科卒業後、外務省に入り、台湾・香港をへて、73年6月から北京の日本大使館に勤務。同年8月から大使館の領事部の仕事を始め、中国残留の日本人孤児たちの手紙に接するようになる。77年5月帰国、外務省を退職した

1945年-慟哭の満州——日本人孤児からの手紙

1978年8月9日 第1刷発行

¥1300

1979年6月15日 第5刷発行

訳編者

橋本カツ子

発行者 東京都千代田区神田神保町1-46

崔 容 徳

印刷者 東京都文京区後楽 2-11-2

道野整版所

発行所 東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル

株式会社 太平出版社 ©

電話 03-295-3531(代表) 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

シリーズ・戦争の証言 20

一九四五年―慟哭の満州

―日本人孤児からの手紙

シリーズ・戦争の証言(第一期・全20巻)を完結するにあたって

1 一九七〇年から準備をすすめてきましたシリーズ・戦争の証言は、八年をかけて、ここによりやく第一期・全20巻を完結するはこびになりました。ながいあいだ熱心なご支持を賜りました読者の皆さまにふかくお礼を申し上げます。

もしこのシリーズが、むなく風化しようとする一五年戦争の体験を正しくうけつぐ作業に多少でも貢献をすることができれば、わたくしたちの最も幸いとするところです。

2 この八年のあいだに、戦争体験を継承する作業が、戦争の体験者ばかりでなく、ようやく「戦争をしらない」世代にうけつがれはじめたことを、わたくしたちはつよく感じております。しかし一方には、「防衛力」強化の名による途方もない軍事力の拡張にみるまでもなく、日本軍国主義の復活への試みが、陰に陽に、さまざまな形で執拗につづけられていることも、見のがすことができません。

3 わたくしたちは、一五年戦争によってむなく失なわれていったおびただしい生命と肉体が、いまだに真に弔われぬまま怨念の魂となってアジアの地を匍い空に満ちている、と認識しています。忘れることのできないあの日の体験の集積を、いっそう国民全体のものにすることは、やはりさし迫って重要なことと思われまふ。

4 戦争中またはその前後に書かれた記録や資料(日記・メモ・手紙、その他)をお持ちか、その所在についてお心当りがありましたら、どのようなものでも結構ですから、小社までご一報下さい。すぐれた記録については、関係者のご承諾を得て、シリーズ・戦争の証言(第二期以下)に加えて刊行したいと思ひます。

一九七八年七月七日

太平出版社 シリーズ・戦争の証言 編集部

例 言

1 本書は、中国残留の日本人孤児からの肉親さがしの手紙(I)、中国に子どもを残してきた母親の手紙(II)、肉親たちからの聞き書(III)、肉親たちとのインタヴュー(IV)を、編集・構成したものである。

I～IVの背景とその歴史的意味については、さいごのV、ならびに「訳・編者あとがき」を参照されたい。

2 Iの手紙は、中国の日本大使館あてに送られたものと、「日中友好手をつなぐ会」(山本慈昭会長)あてによせられたもの——孤児自身の手による中国文の手紙と、中国在住の日本人代筆者による日本語の(または日本語訳による)手紙を、翻訳・整理したものである。

3 なお、編集にあたって、とくに下記の点に留意した。

a 孤児たちの肉親さがしに役立てるために、口絵の写真と本文の発信者名に通し番号をつけた。また口絵の写真には、本人の手紙の収録ページをカッコの中に示した。

b 孤児たちの手紙の翻訳にあたっては、原文を忠実に生かすようにつとめたが、あきらかな誤記、代筆者によると思われる誤訳は訂正した。

c 中国語の簡字体は、すべて正字体とした。また、新字体と代用字をつかった。

d 必要な部分には、「」内に編者注を入れ、原文にある補足()と区別した。

e 日付は、一部に旧暦がつかわれているが、確認できるもの以外は、そのままにした。

4 III・IVのなかには、やむをえない事情で、一部に仮名をもちいたものもある。

5 地名のうち、旧「満州国」の省・県名はそのままにした。また都市名は、文脈にそって新・旧地名を併用し、各編の初出個所の()、「」内にそれぞれ新・旧地名を加えた。

I かすれゆく記憶をたどって

——日本人孤児からの手紙..... 橋本カツ子 訳 29

1	付	鳳 芝		(黒竜江省佳木斯市)	29
2	馬	秀 英		(吉林省長春市)	31
3	劉	德 領		(河北省天津市)	32
4	劉	富		(黒竜江省方正県)	35
5	王	淑 琴		(黒竜江省チチハル市)	35
6	薛	樹 群		(黒竜江省安達県)	37
7	杜	桂 蘭		(遼寧省撫順市)	39
8	張	景 林		(吉林省敦化県)	40
9	梅	笑 連		(黒竜江省チチハル市)	41
10	陳	桂 栄		(吉林省長春市)	43
11	王	玉 芳		(黒竜江省寧安県)	44
12	趙	有 德		(吉林省樺甸県)	45
13	于	広 德		(黒竜江省林口県)	46
14	胡	桂 蘭		(黒竜江省牡丹江市)	47

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
曲	鄒	王	楊	李	張	文	朱	斑	宋	康	鉏	王	李	王	寧	楊	宋	王
桂芳	麗米	家義	子學	今声	國華	景竜	桂琴	秋英	景烈	玉忠	良	桂芳	淑琴	淑雲	文彬	復興	春巧	起元
.....																		
(黒竜江省宝清県)	(黒竜江省勃利県)	(遼寧省開原県)	(遼寧省瀋陽市)	(黒竜江省方正県)	(遼寧省錦西県)	(黒竜江省五常県)	(黒竜江省甘南県)	(遼寧省旅大市)	(山東省済南市)	(黒竜江省千チハル市)	(黒竜江省方正県)	(山西省太原市)	(遼寧省阜新市)	(黒竜江省鶏東県)	(黒竜江省海林県)	(遼寧省瀋陽市)	(遼寧省瀋陽市)	(遼寧省営口市)
66	64	64	63	62	61	60	59	58	57	57	56	55	53	52	52	51	49	49

52	柏建誌	(遼寧省撫順市)	82
51	尚桂琴	(黑龍江省鉄力県)	81
50	劉文德	(現在地不詳)	81
49	潘素生	(内蒙古呼和浩特特市)	80
48	翟来玉	(黑龍江省チチハル市)	79
47	李桂琴	(遼寧省阜新県)	78
46	肖桂芝	(遼寧省瀋陽市)	78
45	李桂芳	(遼寧省台安県)	77
44	潘慶順	(遼寧省瀋陽市)	75
43	李文玉	(吉林省吉林市)	74
42	王景泉	(遼寧省撫順県)	73
41	呉桂蘭	(遼寧省遼中県)	72
40	黄恒禎	(黑龍江省通河県)	71
39	張源財	(黑龍江省方正県)	70
38	張秀琴	(黑龍江省方正県)	70
37	田富	(黑龍江省方正県)	70
36	佟明世	(黑龍江省鶏西市)	69
35	李学漢	(吉林省敦化県)	67
34	謝桂英	(黑龍江省ハルビン市)	66

71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53
李	王	劉	袁	金	顏	王	李	崔	房	孫	甄	申	王	王	苗	孫	高	趙
菊梅	家鰲	玉斌	世忠	淑利	淑琴	喜財	麗	文杰	德利	有君	延軍	樹森	玉華	志山	秀蘭	貴林	淑勤	桂苓
.....																		
.....		(黑竜江省ハルピン市)			(黑竜江省大海林)					(黑竜江省大慶市)				(黑竜江省海林県)		(黑竜江省依蘭県)	(黑竜江省伊春市)	(山東省益都県)
(遼寧省清原県)	(遼寧省瀋陽市)	94	94	93	92	92	90	89	88	87	86	85	85	84	84	83	83	82

90	劉俊榮	（黑龍江省チチハル市）	120
89	張殿閣	（遼寧省撫順市）	119
88	回登昇	（遼寧省瀋陽市）	118
87	王金珠	（黑龍江省ハルピン市）	116
86	徐素琴	（遼寧省撫順市）	115
85	蘇雲祥	（遼寧省西豊県）	112
84	高広学	（吉林省榆樹県）	112
83	張国英	（黑龍江省阿城県）	111
82	周玉芹	（吉林省敦化県）	110
81	隋秀蘭	（遼寧省北鎮県）	109
80	姓名不詳	（現在地不詳）	108
79	韓国勲	（黑龍江省ハルピン市）	107
78	楊文学	（吉林省吉林市）	106
77	喻德海	（吉林省吉林市）	105
76	王晓霞	（黑龍江省佳木斯市）	104
75	趙唱	（黑龍江省訥河県）	104
74	殷来鳳	（黑龍江省ハルピン市）	102
73	姜少秋	（遼寧省撫順市）	101
72	王慶忠	（黑龍江省樺南県）	99

109	東	玉華		(遼寧省瀋陽市)	147
108	韓	在喜		(黑龍江省チハル市)	145
107	周	喜鳳		(遼寧省旅大市)	144
106	張	来柱		(遼寧省撫順市)	143
105	楊	淑珍		(黑龍江省佳木斯市)	142
104	郭	繼光		(遼寧省撫順市)	139
103	李	雲芝		(遼寧省撫順市)	138
102	王	殿昌		(黑龍江省佳木斯市)	136
101	張	福田		(吉林省長春市)	135
100	尚	宝慶		(遼寧省瀋陽市)	134
99	沈	玉鳳		(遼寧省撫順市)	131
98	高	万喜		(黑龍江省牡丹江市)	130
97	張	淑珍		(遼寧省瀋陽市)	128
96	袁	桂珍		(遼寧省撫順市)	127
95	蔡	秀英		(黑龍江省ハルピン市)	126
94	項	淑珍		(吉林省長春市)	124
93	田	玉芬		(遼寧省撫順市)	124
92	杜	広振		(遼寧省撫順市)	123
91	張	治国		(黑龍江省ハルピン市)	122

128	張	蘭桂	(吉林省延吉縣)	172
127	王	淑華	(黑龍江省尚志縣)	172
126	関	大宝	(黑龍江省チハル市)	171
125	趙	恵茹	(黑龍江省ハルピン市)	170
124	ミシロマサキ		(遼寧省瀋陽市)	167
123	邵	丕興	(遼寧省瀋陽市)	167
122	王	桂琴	(吉林省通化縣)	166
121	楊	宝君	(吉林省吉林市)	165
120	張	有財	(黑龍江省佳木斯市)	163
119	孟	桂蘭	(吉林省長春市)	162
118	李	永財	(遼寧省瀋陽市)	160
117	馬	兆介	(吉林省長春市)	158
116	竜	風雲	(黑龍江省ハルピン市)	158
115	馬	桂珍	(吉林省 県名不詳)	157
114	姜	徳順	(遼寧省撫順市)	155
113	王	汝生	(遼寧省旅大市)	152
112	温	学忠	(遼寧省撫順市)	150
111	張	秀珍	(遼寧省撫順市)	149
110	田	風英	(吉林省延壽縣)	148

129	劉	金義	……………	(吉林省敦化縣)	174
130	張	秀英	……………	(黑龍江省尚志縣)	174
131	賀	春天	……………	(黑龍江省佳木斯市)	176
132	曹	桂山	……………	(黑龍江省依蘭縣)	176
133	李	寶金	……………	(遼寧省瀋陽市)	179
134	閔	淑榮	……………	(黑龍江省勃利縣)	181
135	劉	亞光	……………	(現在地不詳)	181
136	平井	和子	……………	(吉林省吉林市)	182
137	徐	美玉	……………	(黑龍江省ハルピン市)	183
138	蕉	玉琴	……………	(黑龍江省寧安縣)	185
139	張	素郷	……………	(黑龍江省佳木斯市)	186
140	王	桂華	……………	(黑龍江省通河縣)	188
141	金	淳成	……………	(黑龍江省阿城縣)	188
142	馬	紀才	……………	(遼寧省瀋陽市)	189
143	周	鳳英	……………	(黑龍江省ハルピン市)	190

II 忘れられない記憶のなかの洋子——ある母の手紙…………… 尾形かほる

III 夢うつつにうかぶ悲しみの日日(1)——肉親たちの聞き書…………… 橋本カツ子

1 涙が枯れるというのは、このようなことか…………… 加藤ひささん

IV

夢うつつにうかぶ悲しみの日日(2)

——肉親たちのインタヴュー——

戦争の証言 編集部

227

1 肌身に抱きしめてきた一枚の写真……田村登米五郎さん 227

2 ようやく妹の消息がわかった!……小林吉一さん 232

3 「つらかった……」亡くなった父の胸のうち……萩原英子さん 242

V

一九四五年「満州」の悲劇とその歴史的背景

戦争の証言 編集部

253

1 引き裂かれた肉親のきずな……253

2 「満州移民」が意味したもの——「王道楽土」と「五族協和」の末路……256

3 「人の道スデニナキヤ」——飢えと死にさまよう難民の群れ……261

4 まっ先に逃げた関東軍と為政者たち……265

5 「無告の民」の声……267

訳・編者あとがき

橋本カツ子

269

I かすれゆく記憶をたどって——日本人孤児からの手紙

橋本カツ子 訳

1 付 鳳 芝 女 黒竜江省佳木斯市

わたくしは、肉親をさがしあててを熱望しています。肉親さがしのことを思いたってから、過去をくわしく回顧していますが、なにぶんにも幼かったので、年齢・姓名・住所など、だいじなことをおぼえていません。それでも、わたくしの記憶の糸をたどってお知らせしますので、手がかりの一つにしてください。

わたくしの家は、農村にありました。戸数はあまり多くなく、二〇〜三〇戸くらいでした。わたくしたちの棟の中間に二つの大きな鉄釜があって、入浴用に使われていました。

わたくしは、小さな友だちとよくそこで遊びました。家はれんがづくりでした。付近に山がありました。だれと山に遊びにいったかおぼえていません。家族は六人、父・母（年齢不詳）・兄・姉、小さな弟です。父親とは、何回も会ったことはないような気がします。母と兄弟四人が家で暮らしていました。皆で食事をしたときのことをおぼえています。母の作ってくれたものは、お米の中に大豆の入ったご飯でした。兄は、もう学校に通っていました。兄は、毎日、白布で書物を包み、背中に負

うか、腰に下げて通学しました。わたくしの記憶では、姉は学校にはいっていなかったと思います。母の顔色はよく、ほおはいつも赤かったことをおぼえています。わたくしの養母の話によれば、わたくしの顔色も非常によく、母と似ているそうです。

さらに記憶にあることは、何の薬か知りませんが、母が薬をわたくしの足につけて包んでくれました（足のやけどだったのかも知れませんが）。また、わたくしは左目の眉の下に傷跡がありますが、何の傷だったかわかりません。右足の太ももに黒いあざがひとつあります。

何年の何月かおぼえていませんが、ある日の午後、雨の中をわたくしは牛か馬で引く木の車（車のまわりは板でかこわれていました）に乗りました。車上で横になって、板の上に落ちる雨の音をききながら、日が暮れるまで進みました。しばらくして、馬も牛もいなくなり、わたくしたちは歩きまわりました。ときには山のすそ、ときには林の中、ときには大きな道でしたが、たいていは大森林の中を歩きました。山野には果実が熟れており、地上に落ちているものもありました。日が暮れると、おとなは木に寄りかかり、子どもは地上で眠りました。雨のときは、樹下で雨をよけました。あるとき、大きな道を歩いて大きな橋を渡ったとき、橋の下に、銃を背にして鉄帽をかぶった人びとがたくさん死んでいました。

いま思い出してもいちばん心の寒くなる記憶は、母が小さな弟をひもで木にかけて殺したことです。ある日の夕暮れ、ある村にさしかかったとき、大勢の中国の農夫が襲撃してきました。そのうちのひとりはおおあさんで、手に棍棒を持ってなぐりかかってきました。わたくしたちは、皆地上に伏しましたが、そのとき、わたくしはなぐられたかどうか記憶がありません。しばらくして、わたくしが頭